

上海市高校教育高地建设项目

内在的力量

——日本古代女性史文化论私考

王 颀 著



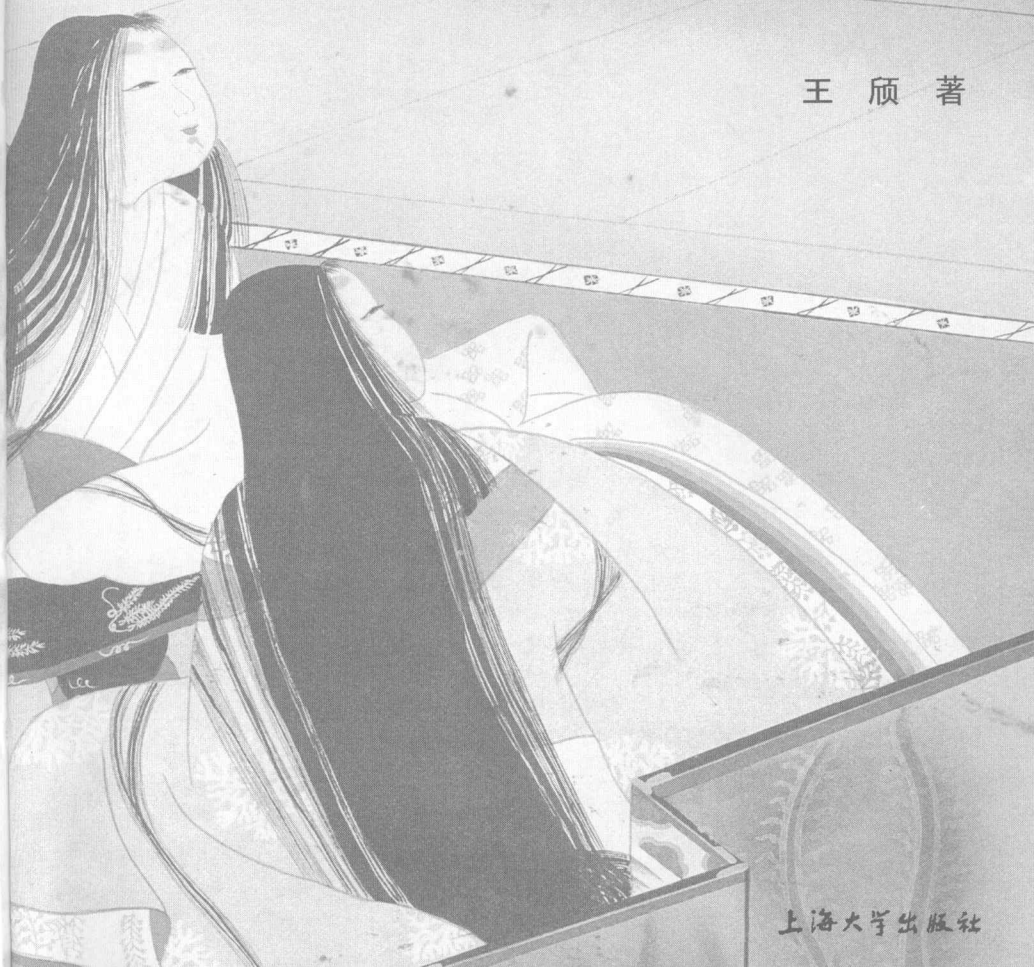
上海大学出版社

上海市高校教育高地建设项目

内在的力量

——日本古代女性史文化论私考

王 颀 著



上海大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

内在的力量：日本古代女性史文化论私考：日文/王
颀著. —上海：上海大学出版社，2009. 1

ISBN 978 - 7 - 81118 - 385 - 6

I. 内… II. 王… III. 女性—文化史—研究—日本—古
代—日文 IV. D443. 139

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2008)第 205636 号

特约审稿 陆小聪

特约编辑 姚东敏

封面设计 柯国富

技术编辑 金鑫

内在的力量

——日本古代女性史文化论私考

王颀 著

上海大学出版社出版发行

(上海市上大路 99 号 邮政编码 200444)

(<http://www.shangdapress.com> 发行热线 66135110)

出版人：姚铁军

*

南京展望文化发展有限公司排版

江苏省句容市排印厂印刷 各地新华书店经销

开本 890×1240 1/32 印张 10.5 字数 376 900

2009 年 1 月第 1 版 2009 年 1 月第 1 次印刷

ISBN 978 - 7 - 81118 - 385 - 6/G · 491 定价：30.00 元

序

本书作者王颀是我在华东师范大学担任助教时的学生，在大学就读期间，对日本文化就表现出较大的兴趣，大量阅读了有关日本女性文化的文献资料，毕业论文也围绕日语中的女性词信了初步的调查研究。大学毕业后为了进一步加深对日本文化的理解与研究，赴日深造。1995年获日本国立御茶水女子大学人文科学博士学位，2000年开始在上海大学外国语学院任教，2006年至2007年曾担任日本明治大学客座教授，与本人从事有关日本文化方面的共同研究。

此次喜闻学生王颀的学术专著《内在的力量——日本古代女性史文化论私考》即将出版，欣喜万分。

近年中国国内的日本文化研究热日趋高涨，日本文化研究学者的人数也呈现出增加的趋势，研究水准也明显提高，我深信本书的出版将对中国国内日本文化的研究起到推波助澜的积极作用。

本书的作者大量地阅读了日本文化的古籍，其中包括《古事记》和《日本书纪》，同时也通读了有关女性文化史的文献以及前辈们的先行研究成果，提出了独到的见解，希望本书的出版能够填补日本古代女性文化史研究的不足，同时，也希望本书能够成为人们了解日本文化的入门书籍。

日本明治大学教授

張 競

2008年7月31日

目 录

序 章	1
第一章 虚構と史実の狭間	9
第一節 卑弥呼誕生の背景	9
第二節 女王卑弥呼	17
第三節 卑弥呼の終焉と古墳時代	35
第二章 シャーマンから女帝へ	69
第一節 シャーマンと祭司	69
第二節 神と王権を繋いだ女王	77
第三節 段階としての女帝	96
第四節 律令と女帝	145
第三章 絢爛たる終焉	195
第一節 平安京のうつろい	196
第二節 平安の陽炎	260
終章——内なる力	312
参考文献史料リスト	328

序 章

私が中国大陸から日本への留学を果たしたのは、二昔も前のことである。大陸にいたときから日本語の勉強は多少していたし、人々の容姿も中国人とはさほど変わらぬ日本人であるので、外国留学という改まったものはなかったけれど、その物質的な豊かさには目をみはらされた記憶がある。そのような私が日本の日常生活を自分の中に取り込んでゆくなかで、改めて驚かされたことがある。それは日本人の女性の日常的に使用される言葉である。

たとえば、日本では小説の中でも日常的に交わされる会話であっても、それが文字として書き表されたとき、さらに、それが文脈を離れてただその一行だけ示されても、明瞭にそれは女性が相手に対して発言していることがわかる。中国語にはそれがないと言っても過言ではない。このようなことは外国人の誰に聞いても同様に言う（もっとも私の知る範囲の外国人の場合ではあるが）。

私は教育学を専攻する一学徒である。その勉強のかたわらにもそのことにこだわりを持ち続けていたあるとき、何気なく金田一春彦氏の「日本語の特質」というタイトルのエッセイ風に書かれた(話された)論文を読んでいて、面白い文章を発見した。少し長い引用になるが書きとめておきたいので記載する。

「私は一度国際基督教大学という大学にいたことがあります、そこにギブスさんという女の先生が居られましたが、その人がアメリカの小説を読んでいるんです。向こうでも最初のうちは「・・・」と彼が言いました、「・・・」と彼女が言いましたと、ちゃんと書いてありますが、途中までいくと、男のセリフ、女のセリフが、かわるがわる書いてある。私たち日本の小説は一行読めば大概わかりますね。どれが男の言葉でどれが女の言葉だということは。アメリカでは男も女も同じ言葉を使いますから、一ページくらい続いておりますと、どっちが男か女かわからなくなります。そこでそのギブスさんが、一ページをもとへもどって、「ワン」「ツー」「スリー」と勘定しまして、奇数番目だか

ら男だと思ってまた読んでいく訳です・・・」①

これも日本語に性別差(以後性差と言うことにする)が存在することを示すものであり、日本語が世界でも特異なものであることを如実に示していると考えても差しつかえないと思うのである。

その原因であるが、ひとつには日本語には、ことに女性の場合、丁寧語、謙譲語が多様に使われていることがあると思う。たとえば、どこかへ行こうとするとき、男は「さあ、行こうか」という。女性は「さあ、参りましょうか」となる。また食事を人にすすめるとき、同僚なら、男は「おい、食えよ」、上位の者には「おあがりください」という。女は「さあ召し上がれ」「召し上がってくださいませ」というだろう。このように、日本語が他の国の言語に比べて丁寧語などが多いせいかも知れない。現実には、私たち留学生が日本語を習得するとき、頭を悩ませたひとつにそれがある。

一体このような現象が、なぜ日本にあらわれたのだろうか、それが私の第一の疑問である。そうした疑問を晴らすべく、私は勉強の隙を縫うようにして、それが言語の問題なるがゆえに言語学の参考になりそうな文献を漁って読んでみた。たしかにその中に私が捜し求めているものはあるのかも知れないけれど、言語学には全くの素人の私にはとても手に負えるようなものではなかった。そこでいったん方向を変えて、日本史を読み漁ることにしたとき、私にヒントのようなものを与えてくれそうなものを発見することができた。それもやはり疑問と言えるものであるが、それは、日本に輩出した一群の女帝たちである。日本史上で明治までに、10人の女帝が即位している。第33代推古帝を皮切りとして、第35代皇極(こうぎよく)、第37代斉明(さいめい)、第41代持統(じとう)、第43代元明(げんめい)、第44代元正(げんしょう)、第46代孝謙(こうけん)、第48代称徳(しょうとく)であり、そして第109代明正(めいしょう)、第117代後桜町(ごさくらまち)の計10帝である。ただし、斉明は皇極の重そ②であり、称徳は孝謙の重そしたものであるから、計10帝のうち、実質的には8帝ということになる。私が知る範囲で中国で女帝は、690年に“則天大聖皇帝”として即位した則天武後の存在が唯一のものとされ、朝鮮でも七世紀にあらわれた新羅の善徳、真徳の二女帝、それに九世紀後半の真聖女王

① 「日本語を考える」大野晋ほか、読売新聞社、昭43.8 所収(P.15)

② ちょうそ、つまり重複して帝位に即位すること。

の三名であるという。^① しかも、こうした一連の女帝は、歴年代を見てもほとんど連続といってもよいほどに連なっており、推古の591年(在位初年)から、称徳の770年(在位最終年)までの179年間であり、その時代は日本文化史上、飛鳥、白鳳、奈良とつづく時代である。そのうえに、史実として現れている女王に、周知のヤマトイ(邪馬台、耶馬台)国のヒミコ(卑弥呼)、その宗女のトヨ(台与)またはイヨ(壹与)、ついで五世紀に一時女王になったと言われるイトヨ(飯豊)、さらには古事記、日本書紀に記述されている、第14代天皇仲哀(ちゅうあい)の皇后であり、第15代天皇の応神(おうじん)の母であった神功(じんぐう)がいるといわれている。そのうえに、そもそもアマテラス(天照)という日本の最高神もまた女性である。これら一群の女神や女王は、ヒミコ、トヨまたはイヨを除いて史実ではない。しかし、たとえそれが神話上の女性であっても、本論では、一応俎上にのせて論究してみたいと考えるのである。

ところで、飛鳥、白鳳、奈良という時代のうち、飛鳥時代、すなわち七世紀は、古代国家の完成に至る、いわば激動の時代であり、大化の改新(645)を断行して、近江朝を立てた実兄第38代天皇天智(てんち)と覇権を賭して争い、勝者となった大海人皇子(おおあまのみこ、第40代天皇天武)とその妃、大倭根子天之広野日女(やまとねこあまのひろのひめ—後の第41代天皇持統)の乱などがあったことは知られるとおりである。しかし、一方で、この時代は中国大陆からの文化が遣唐使の派遣によって活発に導入され、美術史上、七世紀後半は白鳳時代と呼ばれ、また、八世紀の中ごろまでは天平時代と称され、興福寺の仏頭、薬師寺の東塔など、ゆつたりとして壮大な格調高い文化遺産が白鳳時代を代表するものであり、知的で精神性の高い、興福寺の阿修羅像や東大寺三月堂(法華堂)が、天平時代の文化遺産として残されている。^② こうした激動の時代に、どうしてかくまで高度な文化が開花したのだろうか。しかも、七世紀から八世紀にかけては、聖徳太子の憲法十七条が制定されたのをはじめとし(604)、近江令(671)、飛鳥浄御原令(あすかきよみはらりょう)(689)、大宝律令(701)、養老律令(718)等、いわゆる律令制の国家体制が確立されつつあった時代であった。本来律令、すなわち法律、法令というものは、国家体制の秩序のために施行されるものであり、同時に社会的なルールを立てるために基礎となるものであることから、それには論理的な組立てが求められる。その故

① 「古代日本の女帝」上田正昭 講談社学術文庫

② 「日本文化の歴史」尾藤正美 岩波新書(P. 38)—図版—

にそれは男性的な所為であると私は考えていたけれど、そうした所為がなぜ女帝の輩出した時期に組み立てられていったのか、この二点が第二の疑問である。

しかもこのように女帝時代には、権力の争奪のために熾烈なまでの争いが後宮という女性世界をめぐる展開された時代でもある。もちろん、帝王の座を中心とする貴族たちの権勢争奪は表立った男性社会でも、その裏の世界でも争われたことは、世界に共通したことである。しかし、日本の後宮のような女性のみの後宮の存在がそれにかかわったことは稀であるように思えるのである。日本の歴史をひもとくかぎり、後宮の活動がもっとも活発であったのは、この女帝時代と、藤原一族が権勢を争った平安時代(摂関時代)だといわれている。

この点について、問題を絞れば私の疑問はある程度回答を得られるのではないかと考えるのである。

そうしたことから、第三の疑問は、平安中期から後期にかけて勃興した国風文化、文芸、なかんずく清少納言をはじめとする女流文学者の輩出である。もちろん、その前提となるのは、唐風文化から国風文化への移行があったのであり、それを興隆せしめた「ひらかな」の普及があったであろうけれど、なぜこの時期にそうした現象が集中して、文芸だけではなく、建築、彫刻、工芸、絵画、書道に数多くの作品が筆を競うように存在したのだろうか。

平安時代は、約四世紀間もの長期にわたって存続した、日本史上で稀に見る時期である。その中で貴族文化がそれらの絢爛たる文化をもたらしただろうことは言うまでもないが、一面で平安期ほど平安京という日本の首都が荒廃した時期もなかったこともまた事実である。

私が調べたところでも、第62代村上帝(926～967—在位 946～967)から、第73代堀川帝(1079～1107—在位 1086～1107)までの約161年の間で、宮中内裏が火災のために焼亡した回数は、13回の多きに及んでいる。^① 多少その受け取り方に現在との差はあろうとは思いますが、内裏というのは天皇の居住するところである。それが13回も火災に見舞われるということは、常識的に考えても容易なこととは考えられない。

これらのことを十分に考慮の中に入れつつ、私の疑問の点と点とを線で結びつけることによって、そこから何かをつかめるのではないかと考えている。

① 百鍊抄、明月記、民経記

そして、その何かが(今結論付けるのは乱暴のそしりを免れないかも知れないが、私はそれがひょっとすると女性の力ではないのかという仮説を立てている)、日本の歴史を動かし、ひいては日本の文化を形づくっている基層の一端ではないだろうかと、ひそかに考えているのである。

冒頭で述べたように、私は言語学の専門家でもなければ、歴史学の専門家でもない。ましてや文学や文学史、あるいは民俗学、精神史など、こうした問題を解くために必要な学問、知識は全く持ち合わせてはいない。一体、どのような答えが出てくるか、私自身も不安がつきまとっている。けれど、私は私にそうした疑問が生じたかぎり、それを追究してゆくことは、自分自身に対する責任であると考えている。

次に時代区分をどうするかという問題がある。時代、時代をどのように分けるかということについては、さまざまな研究課題によって分け方が違うと思うが、本論では、さきに述べたように、この論文そのものが、通常の論文の型にはまらないところがあると思うので、そのことから型通りの分け方にはこだわらないことが、かえって本論らしいと思う。そこで、本論のタイトルにもあるように、また前述してきた主旨にもあるように、日本の女性ことばの内奥に沈潜する力が、日本の歴史を形成する一端となったのではないだろうかと考えていることでもあることから、時代区分もそれを念頭においた区分を試みたいと考えている。

ヒミコは周知のようにシャーマンでもある。そしてまたシャーマンの存在は古くから、というよりは古い時代なればこそ、現在よりも、はるかに多くの存在が世界の各地で確認されている。ちなみに広辞苑によれば、シャーマニズム(shamanism)は極北、シベリア、中央アジア、北米インディアンに一般的であり、類似の現象は南アジア、東南アジア、オセアニア等にも見られるが、世界観、超自然観や社会的背景を反映して一様ではない。中国、朝鮮、日本では巫術等の名で知られる、とある。しかし、このようにシャーマンの存在が社会的に必要となってくるには、そこに何らかの集団、つまり小規模であってもひとつの社会が形成されていたと見てよい。本論では、第一章として、そこから説きおこしてゆきたいのである。この章では日本語がどこから来たのか、あるいは日本人はどこから日本に渡来したのか、という問題はこれを避け、すでに渡来したことの事実を起点として日本の原初的な集団がどのようなプロセスを経て社会文化を形成していったのかを、中心課題としたいのである。それには、日本人が集落を形成させ、その中でどのように神の存在を考えていった

かを探究するようにしたいと思っている。ところが、日本に神話といわれるものが文献史料から収録できるのは『風土記』『古事記』『日本書紀』のみと考えてもさしつかえはない。しかし、それらは八世紀における記述であって、真正なる神話とはいいがたい。そこから、真正なる神話を引き出せるのか、それがまずさしあたっての課題となるだろう。

飛鳥、白鳳、天平の女帝たちは、まさしく六世紀末の第33代推古女帝(592)からはじまり、第48代称徳女帝(退位770)に至る、178年に及ぶ女帝の世紀を記述、論証してゆくことになる。

日本の女帝の出現は、おおよそ三つの段階に分けられるという。すなわち、第一の段階は巫女王の段階、いうなれば司祭者としての巫女王の段階であり、第二の段階は巫女王から女帝への過渡期の段階、第三の段階は、女帝から司祭者の役割が分離された段階ということになる。言い方を変えるなら、第一の段階では巫女王の存在そのものが国家であり、そうすることによって、神と国家という異質なものの二元対立が一元化されるのである。しかし、それでもなお国家はつねに、国内国外のもろもろの出来事を抱えこむ、複合的な存在である。このような状況は、日本の政策が対内外状況を織りこまなければ成り立たなくなってきた、推古帝あたりから顕在化してくる。したがって、推古女帝から斉明女帝に至る段階では、もはやかつての宮廷最高の巫女王としての施政だけで国家運営は不可能となってゆく。このような状況のもとでは、ことの如何とかかわらず、それまでの巫女王としての役割、すなわち、それまでのように女王を巫女王として神を祀るという司祭者としての役割の転換をはかり、祀られる国家元首、つまり、現人神としての国家元首、天皇として対応させる必要があったと考えられる。そして、それには、政祭の分化をはかり、国家運営組織の中に神そのものも組みこむようになってゆくのである。それが、この第二の段階から第三の段階に至る経緯であったと考えられるのである。

いうならば、国家運営を秩序づけるべき組織は、つねに帝は祀られる帝として秩序組織(ヒエラルキー)の頂点に位置づけられなければならない。それには、位置づけるべき“法”(いうならば天智帝の“不改常典”)と、その位置づけを継続すべき、日嗣が必要不可欠となるだろう。しかも、その“法”でも日嗣の継続は如何ともなしがたい。その部分を補完しようとしたのが後宮の存在であり、女性の存在であったと言えると思う。

日本には、時としてクーデターはあっても、革命という考え方は、ついに生

まれてこなかったといえる。それを日本は権威の永続という形で補ってきたと考えられる。この永続という考え方が、日本の社会、あるいは国家の秩序を維持し、ひいては日本型ヒエラルキーを維持させていることは、江戸時代、明治時代、そして大正、昭和と時代は変わっても連綿として続いてきていると思うのである。したがって日本ではいかに政権が変わっても、この維持されるべきヒエラルキーは崩れることがなかった。そこには、国家というよりも“ムレ(群)”あるいは“イエ(家)”の論理が厳然としてたちはだかっている。ある種の日本の家父長制があり、その家父長制を支える女性の存在が、“ムレ”“イエ”の、あるいは家父長制の手前にあるのではないだろうか。

本論ではこのことをひとつのキーワードとして、日本の古代女性史を展望しつつ、日本に固有な精神領域、文化領域を視てゆきたいと思うのである。

平安時代を特色づけるものはいくつかあるが、政治的には藤原系貴族の勃興であり、文化的には唐風文化の退潮と国風文化の台頭、精神的には仏教の影響による無常感、“もののけ”怨霊(おんりょう)への畏怖などがあり、それらが重なりあい、絡み合ったところにあるともいえる。

そもそも、第50代天皇桓武(737～806—在位 781～806)が、平城京から遷都する意向をもったのは、打ちつづく皇位継承にまつわるスキャンダル、それがからんだ政権を揺るがす事件の多発に頭を悩ませたこと、また、称徳女帝と僧道鏡(どうきょう)とのスキャンダルの根底にある仏教勢力の肥大化に伴う、政治介入などがあったと考えられている。そのような不祥事を払拭するためにも遷都を考え、まず地を現在の京都市の西南に所在する長岡の地を選び、都城建設に入って程ない工事中の長岡京に遷都したのが784年である。しかし、ここでも事件が発生した。新宮造営責任者藤原種継暗殺事件である。こうした忌まわしい事件が次々と桓武帝を襲ったことから、和気清麻呂の進言を入れて、長岡京を放棄し、山背(やましろ)国、葛野(かどの)の宇太(うた)、すなわち現在の京都市に再び遷都することを決意したのは793年のことであり、早くも翌年の794年には遷都が開始された。これが約400年つづいた平安時代の始まりである。

桓武帝は国家経営を、皇親的中央集権制の復活といった方針を明確に示しながら、その基本的な政策を「軍事」と「造作」としたが、桓武の政策を完遂するには、すでに国家財政はあまりにも疲弊していた。それによって「徳政論争」が提案され、これ以上の政策推進は無理であるとして、この二大政策は、桓武の晩年に至って放棄されたのである。

鴨長明の『方丈記』に記載されている目をおおうような平安京の荒廃ぶりは、これによるものである。

にもかかわらず、平安中期から後期にかけて、周知の平安文化の花が咲きえたのは何故だろうか。私は、桓武の二大政策の放棄によって、事実上の天皇の政治的な政策決定権はほとんど消滅したと考えている。それに代ってあらわれたのが、藤原一族の台頭であり、藤原氏を中心とした摂関政治体制であると思う。

しかし、藤原一族が国家経営の中核的な存在をなしていても、日本のヒエラルキー体制を崩壊させるにはいたらず、むしろ権勢の根幹を藤原氏は天皇という権威の下においた。わかりやすくいえば、天皇は藤原氏の財力と権勢を利し、藤原氏は天皇の伝統的な権威を利したといえる。

しかし、このような政治の構造の変革は、後宮の質の変容をうながし、それまでの後宮の存在は、皇位の継承に関わっての存在であったものが、折からの国風文化の勃興とあいまって、女性ならではの知的な要因が、藤原道長の権勢と財力を背景として、後宮において道長の娘の中宮サロニに蟠集した女房たちから花をひらかせていったのである。しかしながら、天皇の勢威を利するための後宮の役割は、後宮そのものの権威と深くかかわっていただけに、相も変らぬ陰謀策術は後宮を背景になされており、それに加えて藤原氏の内部における権勢の争奪が頻度を増していった。

このようなことを踏まえて終章では、疑点と疑点を結びつけている糸を引き寄せ、日本人の精神構造を形成しているものが何であるのかの、一端でも明らかにしてゆきたいと思っている。当然こうした試みは多分野にわたる、専門的な学問の輔けが必要である。それを私のような浅学の者一人で成しうるとは決して考えてはいない。

それでも、いまはこうした考究に必要とされる専門的知識を何ら持ち合わせていない身であればこそ、かえって自由にそれらの間を翔びまわれるのではないか、とひそかに考えている。そして、もしもそうした日本人の精神に内在しているものへ少しでも接近できれば、そこから日本の女性の「内なる力」を視ることができると思うのである。

第一章 虚構と史実の狭間

第一節 卑弥呼誕生の背景

(プロローグ)

「花さい列島」というちょっと耳なれない言葉がある。花さいというのは花で織りなしたような綾錦という意で、そのように連なった列島というのが花さい列島である。それは東はアラスカに端を発し、アリューシャン(アレウト)列島から、カムチャッカを経て千島列島、北海道、日本列島(沖縄を含む)へと弧状に連なる諸列島の美称である。

これらの島々は、約200万年前ごろは陸続きで大陸と結ばれていて、日本海はその内側にある巨大な湖であったと言われている。それが本州の中部を横断する大断層(フオッサ、マグナと言われる、地質学で言う中央構造線)によって、大きく東北と西南部に分けられ、それが植生や諸動物などの存在に影響を与え、ひいては文化それ自体もそれぞれが異なる発達をとげていったと考えられている。

ところで、ほぼ1.2万年から1万年前ごろから地球が寒冷期を脱して、海面温度が上昇するにつれて、海面も盛り上がり、日本海はさらに大きくなって、それにとまってシベリアから南下してきた寒気は大きくなった日本海の水蒸気をはらんだまま本州を縦断する山岳地帯とぶつかり、日本海側に大雪をもたらすようになった。そのような自然現象は、当然植生を含む諸動物植物にも影響した。これらを含めて、日本はさらに東北部の日本海側と太平洋側、西南部の日本海側と太平洋側といった、いわば四つのやや異なる文化圏を育んでいったのである。また、海面が盛り上がることによって、遠浅の海岸線が拡大し、また地上温度が上昇したことによって氷河が流れて茨城県にある霞ヶ浦のような巨大な湖やその他の湖沼が出現して、さまざまな魚介類が息をするようになり、人々はそれを蛋白源として摂取したのである。そしてその

殻を捨てた跡が貝塚である。『常陸国風土記』那賀の郡の条①に“大人(巨人)伝説”があり、その地の貝塚の存在が明記されているのをみても、東国に貝塚が早くも見出されていることがわかる。また、本論でもすでに述べたように、青森県の三内丸山遺跡では、約5千年から4千年前の1.5千年もの長期にわたる、定住に近い形での生活形態の痕跡がみられ、農耕以前の採取経済段階で、このような状態がすでにあったことは、世界の古代史上でも極めて例外的なこととされている。

このように東西の文化相が異なっていることによって、概して縄文中期以前の文化の伝播は、風土上の影響もあって、東高西低といわれている。東日本は、クミル、トチ、ブナ、ナラ、クリといった、落葉広葉樹林帯が繁茂していたのに対して、西日本の方はカシ、シイなどの常緑広葉樹林(照葉樹林)帯によって森林が形成され、どちらかといえば東日本の森林帯の方が、木の実の種類も量も多く食糧として採取できた。さらに、サケ、マスなどの北方系の魚類も多く、食卓を賑わしていたといわれている。

また縄文土器の発達をみても、東日本の土器は火焰土器にみられるような、極めて高い装飾性を示していて、言うなれば非実用的な祭祀に使用されたと思えるようなものであったのに反して、西日本の土器はどちらかといえば簡素で実的なものが多い。

しかし、縄文期も晩期に入り、いわゆる弥生期が近づくにつれて、こうした東、西の文化相の高低が入れ替わりを見せるようになる。そこには農耕の受容が大きい原因となっているが、西日本には農耕受容をしなければならない理由が存在していたのである。というのも先程述べたように、西日本は森林での採取量も種類もそれほど多くはなかったため、当時の人々は遠くヒマラヤの南麓から東南アジア、雲南、揚子江の南に広がる照葉樹林帯文化、すなわち、アワ、ヒエ、モロコシ、ソバといった焼畑農耕の影響をうけ、それを導入してその技術を修得していったとみられ、その集積が縄文晩期には水田耕作受容の素地を整えさせていたと考えられるのである。こうした水田耕作は、人

① 『常陸国風土記』那賀の郡の条「平津の駅家(うまや)の西十二里に岡あり。名を大櫛という。上古に人あり、体、極めて大きに身は丘の上におりて、うむぎ(蛤)を採りて食ひき。その食える貝、つもりて岡となりき。時の人義(こころ)を取りて、今大櫛の岡という。その大人の踏みし跡は、長さ三十歩、広さ二十歩余ありて尿(ゆまり)の跡は、二十余歩ばかりあり」とある。ちなみに、同記が天皇の詔によって編纂を開始したのは、元明帝六年(713)である。また、この貝塚は、今も水戸駅約4キロの地の丘に大串貝塚として残っている。

々を採取経済から解放し、計画経済へと進展するための要因となる居住地の定住化へと向かわせていったといえるだろう。

このように風土上の条件は、風土の相違によってそれぞれの地の文化相を異なったものにしてゆくが、日本もまた例外ではない。しかし、そうしたことが、その後の日本歴史に少なからぬ影響を与えてゆくことになるのである。

以上のように長い時間をかけて進展してきた日本の文化は、それぞれの文化相によって若干異なっているものの、経済的な組織も縄文晩期ごろには徐々に組織だったものが形成されるようになり、居住地への定住もすすんで、これまでのような採取経済から計画経済へと移行する間に、定住をより安定化させるための建築技術も進化していった。また、採取労働から生産労働に移る段階で、必然的に男女の労働分化がすすんで、彼らの集団はようやく社会集団としてのまとまりをみせはじめたのである。とはいっても、このような社会では、まだ男女の性差や、集団としての階級差は発生していなかったと考えられていて、たとえばさまざまな装身具や装飾品も、性差や階級差を表わすものではなく、むしろ呪術的な用途に使用されたと考えられている。

この章ではこのようなことを考慮の中に入れつつ、卑弥呼や奈良時代に輩出した一連の女帝たちの歴史的な虚構と史実を、考察してゆこうとするものである。

紀元前後の日本の状況を、もっとも早く記述した史書は、中国の官撰の史書『前漢書』である。そこには「夫れ楽浪海中に倭人あり、分たれて百余国となり、歳時を以て来たり、献じ見(まみ)ゆ」とあり、『魏志倭人伝』と記述内容はおおむね同じである。前漢は紀元前 202 年から紀元 9 年まで存立した国であり、倭人伝が撰述されたのは、撰述者の陳寿の生没年が 233 年から 297 年とされているから、少なくとも 200 有余年の差があることになる。しかし、倭人伝の記述が、前漢書とおおむね同じであることは、陳寿はこれも参考しながら記述していったと思われる。(もっとも陳寿が、下敷としたのは魚拳(ぎょけん)の『魏略』によるとされてはいる。『魏略』はすでに失われているうえ、魚拳の生没年代も全く不明ではあるが、ほぼ陳寿と同年代の人であったといわれている)このことから、前漢書の倭人も、日本人であったと見てもよい。そしてまた、その倭の国は北九州のどこかであるとして、すでにそのころ「分たれて百余国」の集団、もしくは集落の存在があり、おそらくその中の有力者が、はる

ばる海を渡って「歳時を以て」前漢の皇帝に「献じ見えた」のである。前漢書が記述されたのを仮りに紀元前 100 年ごろとすると、日本では弥生時代の初期にあたる。第一章でも述べたように、そのころではすでに静岡県に登呂遺跡にみられるように、集落の形成も比較的大規模なものになっていて、水耕農作もその附近まで東進していたのであることを考えると、より先進的な北九州ではかなりまとまりをもち、組織化された集団ないしは集落が、存立していたと考えられる。しかし、この段階ではまだ部族集団の首長は、後世のような専制的な存在ではなく、自族の共同体や周辺部族集団の力や慣例などに拘束される。いうならば族長的なものであり、たとえ小さくとも国家の長である王とまではゆかない存在であったと考えられている。

ところで前漢書では「夫れ楽浪海中に倭人あり・・・」とあり、倭人伝では「倭人は帯方の東南大海の中にあり・・・」となっている。この「楽浪」というのは、漢の武帝(在位前 141～前 87 年)が世紀前 108 年に、はじめて朝鮮半島を制圧し半島を四つの郡に分けて支配した、そのひとつで、現在のピョンヤン附近に郡役所があった。その楽浪が接している海の彼方に倭人がいるというのであり、倭人伝の方は、倭人は帯方の東南大海の中にあるとある。帯方という郡は、のち程にも記述するが後漢末期に遼東太守の公孫康(氏)が楽浪郡を領有、204 年頃それを二分し、南の方の郡を帯方郡としたのである。その帯方の東南海の彼方に倭人がいるとあるので、方角は正確に九州を指している。前漢書の楽浪海中は、黄海だけを指し、漠然としている。

その後前漢が倒れ、世紀 25 年後漢の光武帝が漢朝を再建し、行政区画はそのままだに楽浪を根拠地として朝鮮半島を支配し、政策的には土着の部族長たちに中国の官職名を与え、彼らを懐柔して統治するという方策をとった。このような懐柔策は、後漢王朝にとってみれば植民地的存在である、部族間の競争心理を煽りたて助長することで、特定な強力部族の発生を防ぐメリットがあったし、支配下の部族長たちは、中国の官職名を名乗ることによって、自己のステータスと権力が得られるというメリットがあったと考えられている。そして、そのような方策でもって後漢は東方の戦略体勢をより強固なものにしようとしたのであり、その中には当然日本も含まれていることは言うまでもない。

五世紀の宋の范曄(はんよう)が書いた「後漢書」にも、「建武中元二年(世紀 57 年)倭奴国(わのなのくに)貢を奉じて朝貢す。使人自ら大夫(たいふ)と称